

9月13日(水) 18時45分～ 21時15分

近代天皇制とイエ

——中野重治『村の家』の孫蔵像を手がかりに

講師＝渥美 博 (編集者)

会 場＝本郷文化フォーラムホール

参加費＝1,500円(学生1,000円)

わたしは「維新の底流——名もなき人々のたたかい」(拙著『封殺されたもうひとつの近代』所収)の「むすび」の部分で、花田清輝が「二つの絵」で、中野重治の「春さきの風」のなかの母親が死んでしまった赤ん坊の柩の中にじゅず、笠、杖、草履、足袋、おしゃぶりを入れたシーンにふれて「く柳田国男的なセンスでとらえられた日本人の奇妙な風習が、みごとにプロレタリア文学のなかに生かされていることに心をうたれた」と書き当時のプロレタリア文学者のなかで中野ほど日本の伝統を否定的媒介にして、革命の文学をつくりだそうとつとめたものはいなかったのではないかと書いている」と書いた。

書いたが、それからずっと書き足りていないという思いを引きずってきた。すなわち「天皇制近代」が押しつぶしてきた、前近代からの民衆的な可能性を、近代を超えるためにどう止揚していくのかという問題意識が十分に伝わらなかったのではないかと危惧してきたのである。今回の報告はそれを補うという意味もある。

転向小説の傑作として高名な「村の家」であるが、今回は転向して出獄してきた主人公勉次に「筆を断て」と諭す父親孫蔵に焦点を当てて考えてみた。孫蔵は客観的には天皇制支配機構の末端に位置する存在であるが、一方で孫蔵の勉次への口説きには、近世からの村落共同体の肝煎、指導者としての知・情・意が色濃く反映されている。

近世の富農＝村役人層は幕藩体制の支配の末端に位置しながらも江戸の後半期からはしばしば一揆の先頭に立った。近世の村落は明治になって町

村に併合され、天皇制支配の網の目に組みこまれていく。その過程で百姓一揆、世直し一揆、明治初年の反政府一揆、困民党、借金党のたたかいの中で萌芽的にみられた人民主権の意識は封じこまれていった。

孫蔵的なものを^{はら}肚の底でしっかり受けとめ、乗り越えて行く。日本的＝天皇制的近代を超克するためにはそのことが必要である。萌芽的ではあったが、先人たちがつちかった人民主権意識を再びこの手に取りもどすためにも。

中野重治「村の家」は、現在、手にはいりやすいものとして講談社文芸文庫があります。事前に読んでいただくと幸いです。必要な方は、HOWS事務局にコピーがあります。

〈講座の会場〉

〒113-0033 東京都文京区本郷3-38-10

さかえビル2階 小川町企画内

☎03-5804-1656 FAX03-5804-1609

E-mail: hows@dream.ocn.ne.jp

